

## 李春喜先生にお贈りする言葉

鼓 宗

李春喜先生にはじめてお目にかかったのは、自分が関西大学に先生よりもかなり遅れて着任してからのことで、今世紀の最初の年になる。そのやさしいお心持ちは長女が生まれたときに思いもかけずに楽しくすてきなお祝いをいただいてあらためて知るのだが、最初はさわやかで歯に衣着せずに弁舌をふるう方という印象だった。

当時の外国語教育研究機構でも、外国語学部が創設されてからも、李先生が教授会の席で自由かつ闊達に、不思議に感じたことにはそれを疑問として口にされ、心に思うことは意見として公言するお姿が鮮明に思い浮かぶ。この5年ほどは会議が遠隔で開かれるのが当たり前になり、岩崎記念館の2階の会議室に学部の全員が揃うのも1年のうちで数えるほどの機会になってしまったけれども、時に場を和ませ、時に新たな議論を提起する、そうやって風を吹かせてくださるその存在はわたしたちにとって得がたいものであり、機構＝学部の今に通じる風通しのよさを象徴するようであったと振り返って思う。

李春喜先生が、教育と研究、そのいずれにも熱心であられるのはきっとどなたもご承知の通りである。研究の主軸に当たるヘンリー・ジェイムズ研究では、19世紀末に英国で活躍した米国出身のこの作家について論じる際におそらく論点の中核になるものの一つであろう、物語における語りの構造を分析した多くの論文を発表されている。そうしたナラトロジー的なアプローチによる李先生のジェイムズ研究への貢献は、やがて未発表作品の紹介という道にたどり着き、3巻の『ヘンリー・ジェイムズ短編集』の機微の細やかな翻訳として成就している。

近年になると、李先生の慧眼は現代米文学に向けられる。バーズ・アンド・ノーブルによる新人作家の発掘のための賞を受賞したのが1997年のことだから、すでにベテランの域にあると言ってよいJ・ロバート・レノンの短編小説集の紹介は、そのような幅広い探究から生まれた成果である。柴田元幸氏も注目してそのうちの数編を訳出している『左手のための小作品集』は、副題にある通りに100編の超短編が集成されたもので、李先生はテイストを異にするその1編1編をすべて丁寧に読み解いて原作の持つ息吹を伝えている。そこで発せられるセリフがどうしてそのような表現になるのか、そこで取られる行動がどうしてそのように振る舞われたのか、読者には読み流すことが許されても翻訳者は物語の文脈のなかから逐一汲み上げなければならない。李先生の翻訳の洗練は、そうしたものを、つまり行間に見出すべき関係性の糸筋を丹念に読み取ろうとする姿勢——ご自身はもっと的確な言葉で、具体の例を示してお話ししてくださっている。ここに再現できないのが申し訳ない——から得られたものであろう。

日常のなかに垣間見える感覚のずれや不条理を明るみにさらして真実の多重性を意識させるレノンの作品は読者の支持を確実に得たようであり、14の短編を含む同じ作者の『楽園で会いましょう』も、やはり李先生を訳者として出版されている。そこでは、ヘンリー・ジェイムズの翻訳でも発揮された、人間関係のなかに浮かび上がる微細な心理の動きを掬い上げる細やかな解説の眼が同じように働いて、レノンのユーモアや風刺がもたらす軽妙な、しかし時に不穏な味わいをわたしたちに届けてくれる。紀要のこの号が印刷される頃にはさらに、三作目の短編集『静かにしてくれないか』が世に出ているはずである。楽しみに待ちたい。

李先生は、外国語学部の演習では翻訳の指導をなさってきた。どのようにその業を伝えようとしておられるのか、ゼミ生を作品とどのように向き合わせようとしているのか、お話をもつとうかがう機会を持ちたかった、と書くと悔いのようにになってしまうだろうか。李先生の語られることには多くの含蓄がある。例えば、最近では島田雅彦氏も懸念を指摘しているような、AIによる人間の知性の減退を早い時期から憂えてこられたけれども、そのような検索機能の充実がもたらす情報や人工知能による正解が氾濫するあまりにも過保護な時代にあって、これから大学に進んでくる若い人たちに、どのようにして、どのような教育を提供していけるかという模索は、わたしたちが避けて通れない解決の難しい課題であろう。

李先生は、そうした問いから目を背けないように、わたしたちに常に叱咤してくださる貴重な存在であった。技術の恐ろしいまでに急激な発展の奔流に翻弄されかねない今日、足を掬われないように、押し流されてしまわないようにそこに棹を立てる人文科学の役割はますます広がって重みを増していくであろうが、そのような視点に立ってこれからも広く声を発し続けるおつもりとうかがった。

むろん翻訳のお仕事についても、ご退職後にも携わっていかれるとの嬉しいおことばを聞いている。たくさんの作家たちが今もどこかで紡いでいる数多の物語、そのいくつかをすばらしい日本語で読む、という期待をこれまでと変わらずにかなえてくださることを切に望みながら、ますますのご活躍を祈りたい。李先生、ありがとうございました！